わが国におけるメニエール病研究史†

(その1) 明治および大正時代

渡 辺 勲

はじめに

わが国におけるメニエール病の研究は何時頃から、どんな形ではじまったのであろうか。

その後の研究の進展と、それに伴うメニエール病の概念の変遷はどのようなものであったか。

メニエール病の症例数、その病像は時代と共に変化したのであろうか。

わが国の研究と海外の研究とのかかわり合いは、それぞれの時代において、どのようなものであったか。

これらの問題について、筆者の調査した文献資料と、若干の個人的見聞とにもとづいて述べてみたい。

今回は、まず明治および大正時代のことを紹介したいと思うが、なお検索不足で重要な文献資料を見逃していたり、資料の解釈を誤ったりしていることがありはしないかと不安をもっている。

然しながら、筆者自身、メニエール病の研究に関わるようになって40年余となり、この機会を見送ると、史料をまとめて報告することができなくなることもあろうかと考え、あえて筆をとった次第である。

そこで、不備の点や誤りについては、会員諸先生の忌憚のない御意見をいただき、できれば続報において順次これらについて改補してゆきたいと願っている。

I 文献の検索方法

メニエール病の関連文献は、耳鼻咽喉科の専門誌以外にもしばしば見出される。とくに明治の初期から中期にかけては、未だ専門誌は無く——金杉英五郎氏による「耳鼻咽喉科雑誌」第1号の発刊は明治26年(1893)——また邦文誌全般の検索に役立つ文献集抄録誌——医学中央雑誌など——もまだ発刊されていなかったで、系統的、網羅的な検索はできなかった。

そこで、戦前におけるメニエール病の総説で、もっとも文献引用の多い山川の論文¹⁾を出発点として、これに引用された文献の原文を直接に当たりながら関連の文献を順次に探索してゆくこととした。

このようにして、山川の引用文献に、さらにいくつかの追加資料を入手することができた。但し、何分にも年代が古く、国内はもとより、台湾や満州の医学会雑誌にまで及んでいたもので、未だすべての原著を直接読むこと

◎メニエール氏病ニ就テ

(Ueber Meniere'sche Krankheit, Dr. M. Nakamura)

醫科大學助手 中村桃二郎 述

抑メニエール氏病ナルモノハ西曆一千八百六十一年佛醫メニエール氏ガ一處女ニ就テ始メテ實驗名命シタルモノニシテ一日某處女塞習ニ罹リ月經時ニ當テ劇甚ノ眩暈發作及嘔吐ヲ來シ俄然聾トナリ五日ヲ經テ斃レタニ之ヲ剖檢シタルモ腦及脊髓ニ異常ヲ發見セズニテ迷路ニ三半規管ニ出血性滲出物ヲ蓄積シタルヲ認メタリ是ニ於テメニエール氏ハ某處女ノ症徵ハ三半規管ノ疾病ニ相聯帶スルモノニシテ出血其因ナリト斷定シ以テ之ニメニエール氏病ノ名ヲ附シ世ニ公ニセリ(Can. méd. de Paris 1861)

次テボリツェル氏ハ一千八百六十二年五十六歳ノ一婦

(東京医事新誌六八一号明治二十四年より)

図1 メニエール病に関する総説の一つ(冒頭の部分)

†History of Research on Meniere's Disease in Japan (Part I) Meiji and Taisho era
Isamu Watanabe
神経耳科学研究室

血からの類推（シャルコー、ブルネル、キルヒネルら）などに言及していることである。

II メニエール病の概念のわが国への導入

欧米、とくにヨーロッパの医学におけるメニエール病に関する情報が、如何なる形でわが国に導入されたについては推論の域を出ないが、明治維新前後における外人医師の来日、欧米の医学書の流入のうちに、メニエールの報告(1861)が紹介されたことがあるだろうか。今のところ何とも云えない^{2)~4)}。

はっきりした記録として残っているのは、明治24年(1891)東京医事新誌に掲載された中村桃二郎の総説である⁵⁾。メニエールの報告(1861)をまず紹介し、ついでポリツエルをはじめ多くのヨーロッパの報告を引用しつつ論評を加えている(図1)。然し、メニエール自身が1剖検例のみからその原因を内耳出血と断定し、メニエール氏病の名を附し世に公にしたと記しているのは誤りであり、おそらく原著を読まずに、他の文献を読んでこのように引用したものと思われる。論議はもっぱら、内耳疾患か、頭蓋内(中枢神経系)疾患か、あるいは両者関連して生ずるかの病巣問題に限られ、「症候群」という考え方は全く述べられていない。結局、反復性のめまい発作と耳症状を有する内耳疾患の存在を一応肯定してその臨床像の特徴を述べているが、いずれも海外文献からの引用と思われ、一部に顔面神経麻痺の合併が稀でないとか、10年間メニエール病によって歩行困難を生じたとか、現在の常識では考えにくいことも記されている。

間もなく、4年間のドイツ・オーストリアの私費留学を終えて帰国した金杉英五郎の講演「メニエール」氏病に就ての記録が明治26年（1893）の順天堂医事研究会報告に2回にわたって掲載された⁶⁾。その構成の確かさ、文献引要の広範にわたっていること、そして要領のよいまとめまで、さすがに見事な総説となっている。

まずその冒頭において「無熱にして突然劇烈なる眩暈を發し、耳鳴・嘔吐・失神状態・重聴・回轉運動等の諸症状を伴ふ一症あり、名付けて『メニエール』氏病と云う」と定義し、ついでメニエールの原著の紹介とその背景と思われる基礎的知見を解説し、ポリツエルらの剖検例を含む多くの症例報告をふまえて、このような諸症状を有するものは、全部とは云えないが、多くのものが迷路性と思うと明言する一方、経過を追うと小脳腫瘍であったことが判明した例も引用して注意を喚起している。さらに注目すべきことは、メニエール病の内耳病変の発生機序に関連して、内耳リンパ管またはその分枝の排泄路の障害を推定したブルネルらの文献の引用、めまい発作中にあらわれる眼振の記載、発作の反復性、内耳の血管運動神経の異常について、眼球血管の痙攣性局所貧

一般に予後は不良で治癒に赴くことは稀で、多くは完全耳ろうを来たとし、またこれを要するに、「病」とすることは穏当でなく、「メニエール氏眩暈」とすべきであるということが各国専門家の合意するところであると述べている。

そして最後に、今後の研究にまつところが多いが、これは「断然、耳科医の領分に属するというも過言にあらざるべし」とある。時あたかも、賀古・金杉らによって相ついで本格的な耳科・喉頭科の診療がはじめられ、またこの年には、現在の日本耳鼻咽喉科学会の機関誌の創刊号となった「耳鼻咽喉科雑誌」第一号が発刊されたことを考え合わせると、誠に印象的なことである。

III 明治・大正期の症例報告

前述の中村，金杉らの総説には未だわが国における実験例（症例）は引用されていなかったが，その後各地において症例報告が相次いで報告された^{7)~20)}。メニエールの名が冠されて，明治・大正年代に報告されたもののうち，現在迄に直接原文を読むことができたものは13編，18例であり，初期のものは学会報告の抄録のようなもので，記述も簡単である（図2）。したがって年齢や性別さえも不明のものがあるが，男13例，女4例，不明1例で，年齢分布は10歳台1，20歳台3，30歳台3，40歳台

號八十二百九第誌新事醫京東

○メニエル氏病患者一實驗

長野縣 倉根國吉

蕎麥、山梨、蠶ノ産、距今五年前、執業ノ際、突然劇甚ノ眩暈耳鳴惡心嘔吐重聽頭痛ヲ發シ坐位ニ堪ヘス年二—三回發作シ二三日—四五日間繼續ス、二十八年十一月十六日離床ノ際、俄然發作シ爾來歇止セザルカ故ニ同月二十四日順誠醫院ニ來リ治テ乞ヘシ。

之ヲ檢スルニ患者ノ訴フル所ニ據レハ高度ノ眩暈耳鳴、輕度ノ頭痛、重聽アリ殊ニ左側ニ甚メシ聴力ヲ檢スルニ時儀ハ右 $\frac{300}{100}$ 左 $\frac{500}{100}$ ヲ與ヘサエーベル試驗左ハ殆ト成セス、リネネモ左ハ稍佳、鼓膜ヲ外聽道ヨリ檢スルニ異常ナシ、故ニゾニエル氏病ト診斷シ器械的療法ヲ施シ沃刺臭刺、鹽規、必魯加兒必得等ヲ與フルニ二—三週日ニシテ大ニ輕快シ今尙治療中ナリト雖モ恐クハ全治スルノ望アルヘシ。

(東京医事新誌九二八号、明治二九年より)

図2 メニエール症例報告の一つ(全文)

3, 50歳台3, 60歳台0, 70歳台1, 不明4であった。但しこれらの中には、外国文献のほん訳による2例(48歳男と46歳男)が含まれている¹¹⁾¹²⁾。また、他の1例は中国人(34歳男)であった¹⁵⁾。

これらの外国人症例を除いて、病型を大まかに分類してみると、末梢性、すなわちいわゆる耳性メニエール症候群あるいはメニエールめまいは10例、中枢性ないしは頭蓋内疾患と思われるものは2例、分類不能3例となった。

さらに末梢性を細分すると、厚生省研究班の診断の手引きに準拠すると、メニエール病確実例ないしは疑い例を判断されるものが4例、中耳炎による内耳障害と思われるもの3例、突発性難聴と思われるもの2例、内耳梅毒の疑いあるもの1例であった。

症例報告(古くは実験と記されている)は明治の後期から大正と時代が進むにつれて、各種の全身的、局所的検査データも加えられて、次第に充実したものとなっているが、聴力検査は音叉中心で、オーディオメータの利用までには、昭和年代に入ってから、なお20余年を、また電気眼振記録(ENG)の普及までにはさらにその後10余年を要した。

また、内耳の病理組織学的研究も各大学の研究室を中心にわが国に定着しつつあったが、山川強四郎(阪大)の剖検例となって結実するのは、やはり昭和に入ってから10余年の年月を要した。これらのことについては次回以降に順次述べることとしたい。

(未完)

本稿の要旨は、平成元年7月1日、厚生省特定疾患「前庭機能異常調査研究班」平成元年度第一回総会において講演した報告の一部である。この機会を与えて下さった班長・北原正章教授、ならびに Equilibrium Research 編集委員の方々に深く感謝する。

文 献

- 1) 山川強四郎：メニエール氏病。久保猪之吉編。日本耳鼻咽喉科学会書 第3巻の1，聴器疾患(2)の1。126-137頁，克誠堂，東京，昭和8年 1933
- 2) 大藤敏三：日本耳鼻咽喉科史序説。四三会誌，第62号。14-27頁。昭和59年(1984)
- 3) 小関恒雄，北村智明，H. フィアンデン：外国人のみた明治10年頃の日本の医学校。日本医事新報 No. 3287 (昭62. 4. 25) p. 59-62. および No. 3288 (昭62. 5. 2) p. 66-69 (1987)
- 4) 賀古鶴所：耳病の説。第一回日本医学会誌。明治23年4月3日講演要旨，1890
- 5) 中村桃二郎：メニエール氏病に就テ。東京医事新誌 681：573-681，明治24年(1891)
- 6) 金杉英五郎：「メニエール」氏病に就て。順天堂医

事研究会報告 No. 145, p. 18-22, 同 No. 146号 p. 55-59, 昭和26年(1893)

- 7) 林 友太郎：メニエール氏病ノ実験。東京医事新誌 901：1201-1202，明治28年(1895)
- 8) 倉根国吉：メニエール氏病患者一実験。東京医事新誌 928：101，明治29年(1896)
- 9) 安藤庄之助：耳鼻咽喉科雑誌 第4号及び第8号。明治27年，28年(1894)(1895)，10) 吉田による
- 10) a. 吉田坦藏：メニエール氏病ニ就テ。台湾医学会誌 No. 5 p. 6-24，明治35年(1902)
b. 吉田坦藏：メニエール氏病ニ就テ。岡山医学会誌 No. 156, p. 11-18，明治36年(1903)
c. 吉田坦藏：メニエール氏病ニ就テ。東京医事新誌 No. 1291, p. 162-165 ; No. 1292, p. 204-212, 明治36年(1903)
- 11) ゲンシャイト(岡田和一郎抄)：メニエール氏病ニ就テ。(岡田和一郎抄)大日本耳鼻咽喉科学会会報 8(6)，71，明治35年(1902)
- 12) シャルコー(風山隠士訳)：爆発によりて耳を負傷し終に耳の爆傷によりて発したるメニエール氏眩暈。(風山隠士訳)シャルコー氏臨床講義 32。東京医事新誌 1290：1-4，明治36年(1903)
- 13) 久木田七郎：めにーる氏病に塩酸規尼涅ヲ持続シテ中毒ヲ発起セシ一例。中外医事新誌 592：1534-1536，明治37年(1904)
- 14) 藤原齊家：メニエール氏病ノ治験。芸備医事 125：207-208，明治39年(1906)
- 15) 中 金一，黒田 静：めにえーる氏病の一例(臨床講義)。福岡医科大学雑誌 2(2)：155-161，明治41年(1908)
- 16) 夏目陸次郎：めにーる眩暈ノ梗概ヲ述ヘテ実験患者4例ニ及ブ。好生館医事研究雑誌 15(5)：37-43，明治41年(1908)
- 17) 馬島春海：メニエール氏病ノ2例。軍医団雑誌 55：114，大正4年(1915)
- 18) 清水政視，青井節郎，天野純雄：メニエール氏眩暈ノ一例患附者供覧。中央医学会雑誌 27巻 152/153：464，大正9年(1920)
- 19) 小田大吉：メニエール氏徴候群と其原病竈(巢)。岡山医学会誌 440：1039-1040，大正15年(1926)
- 20) 大澤五郎：メニエール氏症候群を有する患者の供覧説明。満州医学会誌 3(1)：134，大正14年(1925)

原稿到着：平成1年10月12日
別刷請求先：渡辺 勲
〒113 東京都文京区湯島 3-17-14
ウエルシティ305号室
神経耳科学研究室